

# ほろよい from yamagata プロジェクト

vol.2 2018年3月発行

ほろよい from yamagata プロジェクト

vol.2 2018年3月発行



特集

## 甦る。

浪江を想い醸す酒に「甦る」ことを誓う。

「鈴木酒造店」

東日本大震災と原発事故。

二つの苦難を強いられた酒蔵は、二つのふる里を持つ蔵となった。

福島県双葉郡浪江町、鈴木酒造店。  
2011年3月11日、東日本大震災で全てを失い、一度は諦めかけた酒造り。  
奇跡的に残っていた蔵の酵母。  
もう一度酒造りをしよう。  
亡くなった方たちの生きた証を酒造りに込めよう。  
「海に一番近い」蔵は、海のない山形県長井市で再び酒造りの道を歩み始めました。  
「甦る」は、  
長井に避難している被災者の皆さんが米作りに携わり、「幻」の酒米を甦らせて出来たお酒です。



### 「純米吟醸 甦る 720ml」

バナナ系の穏やかな香りに、ふくよかなお米の味わいが広がります。今年の後味がスッキリとなるよう、一段と手をかけて醸しました。酒米「さわのはな」は、レインボープラン認証米(※)。ラベルのデザインは「思いやりと心意気の輪は限りなく」がテーマです。裏ラベルには、福幸ファーム村田さんから、福島県の方々へのメッセージが添えられています。ぜひラベルも見てくださいね。

#### 【鈴木酒造店】

原材料：米・米麴  
原料米：長井産さわのはな100%  
精米歩合：55%  
アルコール分：15度 日本酒度：±0～+2  
酵母：オリジナル酵母

※レインボープラン認証米とは  
長井市が循環型社会(農業)をめざし、一般家庭用生ゴミを回収し堆肥へと変えて土づくりを行い、減農薬・減化学肥料により栽培し、より安全と認証されたお米です。



#### ほろよいプロジェクト 創刊号「酒米くらべ」バックナンバー

- 和田酒造「改良信交 特別純米 あら玉 生原酒」720ml 1本
- 六歌仙「山法師 純米超辛口生原酒」720ml 1本
- ほろよいプロジェクトオリジナル 小冊子1冊(10頁)

#### 1セット¥3,000(税込)

※ご希望の方は、OSAKE MARCHEとうかいまで直接お問い合わせください。

■Special Thanks  
鈴木酒造店・鈴木酒造店長井蔵

■Editorial Design / Web Design  
長岡信也・池野剛

■販売元・お問合せ  
OSAKE MARCHEとうかい(おさけまるしえとうかい)  
〒990-0057 山形市宮町2-4-45  
TEL.023-622-6355 FAX.023-624-5618  
e-mail:horoyoi@osake-toukai.com

■発行人  
東海林由子・小笠原真紀子

#### ——想いを馳せるひととき。

「ほろよいプロジェクト」はのんびり、ゆっくり、不定期発行。

※1セットから30円(お客様10円、蔵元様10円、プロジェクトスタッフ10円)気仙沼市の奨学金へ募金させていただきます。(のんびりが未来を担う子供たちを応援するのだ!)

「ほろよいプロジェクト」の最新情報は…  
<http://osake-toukai.com/horoyoi>  
<facebookページ「ほろよいプロジェクト」>  
…で発信しています。  
ぜひフォローしてくださいね。

発行人／東海林由子  
小笠原真紀子

発行・編集／ほろよいプロジェクト  
山形市宮町2-4-45 ☎023-622-6355 (おさけまるしえとうかい内)



## 特集 「甦る。」

福島県双葉郡浪江町請戸（うけど）。

漁業が盛んな港町に鈴木酒造店があった。

廻船問屋を営む傍ら、天保年間より酒造りを行ってきた酒蔵だ。

東日本大震災で全建屋流失。

現在、山形県長井市で鈴木酒造店長井蔵として酒造りを続けている。

社長であり杜氏の鈴木大介さんに震災当時のこと、

そして、毎年3月11日に合わせて出しているお酒

「甦る」に込める想いについてお話しを伺いました。



—浪江町の蔵は日本一

海に近い酒蔵と聞きましたが

位置的に目の前でしたね。弊社の代表銘柄「磐城壽（いわきことぶき）」は、めでたい名前ということもあって、縁起を担ぐ海の男たちに好んで飲まれていた地酒でした。

—震災直後は、

どんなお気持ちでしたか

一番きつかったのは、浪江を離れなくてはいけないだけでなく、酒造りも出来なくなっていました。

まったことでした。地酒というのはその土地で造られ、飲まれるもの。長年の繋がりを地縁ごとなくした喪失感は大きかったですね。

震災だけでなく原発事故もきつかった。立ち入りが規制され、捜索が着手されたのが一カ月後。すぐに行けば助かる人もいた。助けられなくてもせめて時間を置かずに入れたら、遺体の尊厳は保てたんじゃないかと。遺体の損傷は激しく本当に酷かった。火葬する時に黒い袋に詰められたまま、お世話になった人たちにお別れの対面をしました。当たり前のお葬式すらできなかつたのがとても悔しかったです。

—酒造りを再び始める

決心をしたのは

福島県の試験場に預けていた自社酵母が奇跡的に残っていたんです。酵母が見つかったことで、再び酒が造れるんじゃないかと思えました。

震災の時、津波から走って逃げている途中で、私はトラック

の荷台に飛び乗り難を逃れました。後ろを振り返ると、知っている人たちが次々とのまれていくのが見えたんです。絶対忘れられない光景です。

先進的な農業に取り組み、浪江の土地ならではの米作りをしてきた契約農家さんも、一家全員が亡くなってしまった。酒造りを続けることで、素晴らしい米作りをする人がいた、という事実や、沢山の人の生きてきた証を残せるのではと、思うようになつたんです。

何よりもいろいろな所で「また酒が飲みたい」という声を沢山かけられた。震災から四カ月後の7月、会津の蔵を借りてタンク1本分だけ酒を造ったら、浪江の人たちが、それぞれの避難先から買い求めてくれ、すぐになくなった。改めて地酒は地域のアイデンティティの一つだと感じ、時間を空けず、すぐに酒造りをまたやりたい、もう一回勝負しようと思いました。

—海に近いところから、海のない長井市へ来たきっかけは



東洋酒造の建物だけでなく「一生幸福」のブランドも一緒に引き継いだ

震災当時、百歳近い祖母がいました。電気も水道も止まっていた福島の避難所に入る体力がなく、山形県米沢市に避難しました。着の身着のまま、何ひとつ持たず、気付けば長靴姿でした。米沢で唯一の知り合いだった農大の同級生、新藤君（新藤酒造店専務）が、避難所探しや、家族全員分の生活必需品を持ってきてくれ、助かりましたね。

—東洋酒造さんの

ブランド酒も造っていますが

蔵を引き継ぐ時「うちの酒を残してほしい」との申し出がありました。酒に対する想いというのは、被災してから強く感じていたので、東洋酒造さんの「一生幸福」というお酒も精一杯造らせてもらいたい、と伝えました。



磐城の取引先の酒屋さんたちが持ってきてくれる「杉玉」は7つになった



残っていた写真を元に福島のお酒屋さんたちが看板を復刻して寄贈



狭い蔵での作業を効率よくするために、オーダーで作った放冷箱



東洋酒造時代からの和釜。二つの酒蔵の心意気が一つの釜に込められている

— 浪江と長井。繋がるものが  
二つになったということですね

そうですね。ハッピーな名前の  
銘柄と出会ったのもご縁だと思  
っています。「一生幸福」と「磐  
城壽」、それぞれの地域ですつと  
親しまれてきたお酒なので、こ  
れからも地元で愛される「祝い  
酒」にしたいと思っています。

— 長井で始めてみて、  
実際にどうでしたか

誰も知り合いがない中で、  
どうやって酒造りをし、販路を  
開拓していくか悩みました。地  
域のコミュニティに入っていく  
には、まず農家さんからだと思い、  
自分から足を運び、繋がりを作っ  
ていきました。

米が足りなくて困っている時  
も農家さんの方から「米、大丈  
夫か？」と声をかけてくれた。  
嬉しかったですね。

今は先進的な農業に取り組ん  
でいる若い契約農家さんたちが  
いてくれて、とても心強く思っ  
ているところです。

わのはな」での酒造りを依頼さ  
れました。

もともと東洋酒造さんでは、  
酒造りに「さわのはな」を使っ  
ていましたが、奨励品種からは  
ずれたため幻の酒米となってい  
ました。

長井の農家さんが、持ってい  
た種籾を特別に譲ってくれ、度々  
農業指導をしてもらったおかげ  
で「さわのはな」は甦りました。  
だからこのお酒には、お米と震  
災復興、二つの「甦る」が詰まっ  
ているんですよ。何より避難者  
の方と長井の皆さんが協働で米  
作りから酒造りまで携わってご  
縁が繋がった、思い入れのある  
お酒なんです。

※レインボープランとは長井市が市内の一  
般家庭の生ゴミを堆肥化し安心・安全な農  
産品を再生産する国内初の循環型農業

— 素敵なラベルですね  
どんな味わいですか

ラベルは「思いやりと心意気  
の輪は限りなく」をテーマにデ  
ザインしました。私たちが事業  
再興に漕ぎ着けることが出来た  
のも、大きく温かな良縁の輪が

— 長井での酒造りについては  
どうですか

一番違うのが水です。浪江で  
使っていた水は海に近いことも  
あり、かなり特徴のある硬水で  
した。お酒を半年以上寝かせな  
いと旨みが乗ってこない。全体  
的に男性的な味わいで、舌触り  
がとろっとしている。浪江でし  
か出来ない酒造りでした。

一方長井は全国トップレベル  
の水質を誇る超軟水。だから酒  
が仕上がるのとすぐに飲め、清々  
しい味わいになります。あまり  
にも対照的で苦労することも多  
いです。

— 3月11日発売のお酒  
「甦る」についてお聞かせ下さい

福島県から長井市に避難して  
きた人たちが、NPO法人レイン  
ボープランの支援を受け「福幸  
ファーム」を立ち上げました。  
農業を通じて積極的に交流する  
姿に、自分にも何か出来ること  
はないか、と思っていたところ、  
福幸ファームさんから酒米「さ

あつたからに他ありません。福  
島と長井が繋がる酒になれば、  
と願いを込めました。

バナナ系のおだやかな香りの  
中に、ふくよかなお米の味わい  
が広がります。雑味がなく綺麗  
な味に仕上がりましたよ。

— そして、子供たちへの  
支援のお酒と伺いましたが

原発事故による避難の一番の  
犠牲者は子供たちです。売りに上  
げの一部を避難児童・生徒の支  
援金として送っています。今年  
は4月に小・中学校が開校す  
る浪江町の教育委員会に寄付を  
行う予定です。

— 大介さんからみなさんに

震災から7年が経ち、被災者・  
避難者の方たちの置かれている  
立場は、孤立化と複雑化が増し、  
原発災害の根深さを痛感します。  
田んぼから始まる「甦る」を通  
じて、微力ながら被災者の明日  
への一歩となり、陽の循環が少  
しでも広がるように頑張ります。



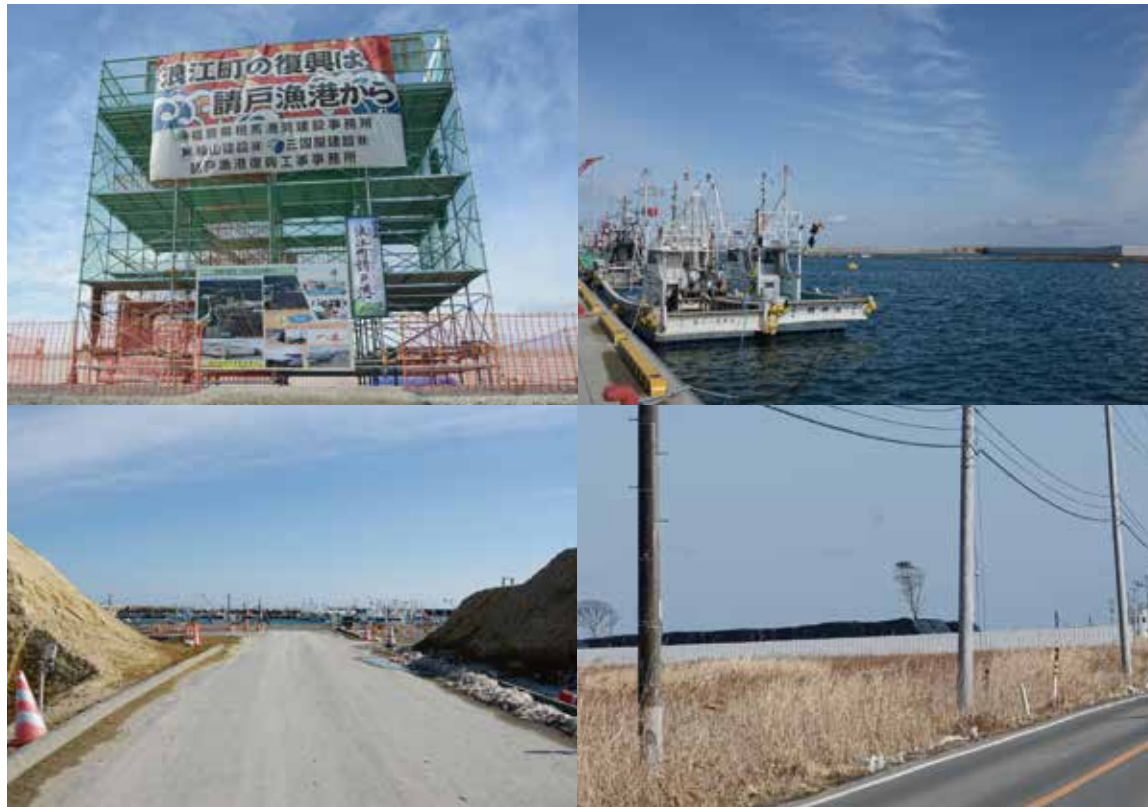
【鈴木大介氏 プロフィール】

1972年3月生まれ。東京農工大学を卒業後、  
奈良県の梅乃宿酒造にて修行。1999年、鈴木  
酒造へ戻り現在に至る。酒造りだけでなく、  
酒粕を食べられる堆肥に変えたり、味噌製造  
にも取り組んでいる。

〈株式会社鈴木酒造店〉  
福島県双葉郡浪江町大字請戸字東向 10  
〈長井蔵〉  
山形県長井市四ツ谷 1-2-21  
TEL 0238-88-2224  
<http://www.iw-kotobuki.co.jp/>



浪江と違い、厳しい寒さが続く長井  
の蔵。蒸し米は手作業で冷まされる



## 浪江リポート

太平洋側には珍しく道沿いに雪景色が続く1月29日、私たちは福島県双葉郡浪江町に向かって山形から車を走らせた。東日本大震が起これなければ知ることも行こうと思うこともなかった浪江町の今がどうなっているのか。鈴木酒造店さんがどんな風景のところで酒造りをしていたのか見てみたい。震災と原発。二つの苦難を強いられている現実を感じたかった。

復興作業に携わっているトラックがひっきりなしに行き交う国道6号線を南下し浪江へ入る。一見すると何事もなかったかのような風景だが、国道沿いのところどころに津波が押し寄せた高さを示す表示や除染廃棄物の仮置き場があり、震災の爪痕がいやでも目に入る。

鈴木酒造店さんがあった請戸地区の漁港へ向かうと様相は一変。2、3棟残された家があるだけで、荒れ果てた原野が広がっていた。酒蔵の住所をナビにセットするも、同じところをグルグル廻るだけでたどり着かない。それほど変わってしまったのだろう。

漁港には「浪江町の復興は請戸漁港から」の大きな幕が貼られた足場のような建物がポツンと建つのみ。ちょうど白魚漁に出かける準備をしていた漁師さんたちに声をかけてみた。

2年前からようやく請戸に入れるようになり、建物の取り壊しや整備が始まったこと、今日使う船は奇跡的に流されなかった8艘のうち1艘であることなどを話してくれた。鈴木酒造店さんの場所を尋ねると防潮堤のすぐ後ろだと教えられた。

海からわずか数百メートル。なるほど「日本一海に近い酒蔵」と自慢する意味がわかる。しかし原野化した風景から震災前の様子を窺い知るようなものがない。何ひとつないのだ。港から直線にして6キロほどのところに、福島第一原子力発電所の排気筒が見えた。

本来なら、今頃港は白魚漁で活気づき、鈴木酒造店の酒で一杯やりながら笑い声が響いているのだろうが、冷たい風が吹き付ける漁港は、悲しいくらいに静かだった。

国道の反対側には、浪江町役場があり周辺には住宅が立ち並ぶ。「ここは大丈夫だったんだ」と思ったのは一瞬で、よく見ると壊れたまま手つかずの状態の家々ばかり。当然、ほとんどが空き家。聞けば、立ち入れるようになったところは一部に限られ、ライフラインもまだ完全ではないそうだ。400人の方たちが帰還しているというが、厳しい環境での生活の大変さが窺い知れる。

原発の近くまで行ってみようとさらに国道を進むと、ほどなく信号は点滅信号に変わり、国道以外、ありとあらゆるところにバリケードが張りめぐらされ、立ち入れないようになっていた。

7年を経て、確実に遠ざかる震災の記憶の傍らに、時が止まったままところが多い現実には強い衝撃を受けた。それでも話を伺った皆さんは「ようやく復興が始まった」と笑顔で話をしてくれた。

今回私たちが見たのは、ほんの一部にしか過ぎないが、復興への道のりが、遠く険しいものだということだけは、一目瞭然であった。全ての被災地の皆さんに一日も早く、穏やかな生活が戻ることを願うと同時に、私たちに出来ることを今一度考えたい。